

Newsletter 31

日本比較文学会中部支部 2023 年秋号

巻頭言 日本比較文学会第 54 回中部大会シンポジウム報告

ウイリアム・フォークナーの日本訪問余滴—冷戦期文化外交と日本人作家

司会・パネリスト 森 有礼(中京大学)

パネリスト 金澤 哲(京都女子大学)

パネリスト 相田 洋明(大阪公立大学)

ノーベル賞作家であるウイリアム・フォークナーは、1955 年の 8 月に米国国務省の文化使節として日本を訪問した戦後復興の只中にあった日本を訪問した。彼の訪問はその後の日本に多岐に亘って大きな影響を与えた。東西冷戦下における米国の文化外交という観点からもその意義は極めて重大ではあるが、その評価はこれまで殆ど行われてこなかった。今回のシンポジウムでは、2022 年刊行の『ウイリアム・フォークナーの日本訪問—冷戦と文学のポリティクス』(松籟社刊)に基づき、フォークナーが果たした文化外交使節としての役割について概括するとともに、フォークナーの訪日が日本の社会、そして日本その作家達に残した余波について検証を試みた。

森有礼はフォークナー訪日の足跡を紹介しつつ、この作家が残した日本滞在記「日本の印象」やエッセイ「日本の若者達へ」、及びフォークナーと交流した人々の記録を紐解きつつ、この作家が文化使節として果たした役割を確認した。南北戦争と太平洋戦争の記憶をアメリカの南北戦争の敗北の過去に準えながらリベラル・ヒューマニストとしてのペルソナを駆使することで、フォークナーは日本人の戦争に対する国民的トラウマに共感しそれを慰撫した。それは彼を偉大なる戦後モラリストとして日本の文学界に位置付ける結果となると共に、戦後の日本におけるフォークナー研究、延いてはアメリカ文学研究を脱政治化することで、日本をアメリカに対して和解させる結果となった。

これに対して金澤哲氏は、安岡章太郎の『アメリカ感情旅行』の精読を通じて戦後日本文学に内在する批判的政治性を再確認した。アメリカの文化外交政策の一環である「ロックフェラー財団創作フェロー」プログラムで南部に留学した安岡は、同作の中でアメリカ南部と日本とを同一視するフォークナーのレトリックを批判的に解体してみせる。南部での滞在を通じて安岡は、両者の和解はあくまでアメリカの文化的素地においてしか果たされ得ないことを明らかにすると同時に、それを可能とする南部には、日本人の立ち入る余地がないことを実感することで、戦争の過去を忘却させようとするフォークナーの、延いてはアメリカの「和解のレトリック」を解体し、終わらない「戦後」に拘り続ける日本文学の姿勢を貫いていることを確認した。

相田洋明氏は大江健三郎の「飼育」とフォークナーの比較を試みた。大江はフォークナーにくり返し言及しており、また同作とフォークナーの小説とは、登場人物である黒人の扱いや、地域社会(共同体)と中央(国家)とを対比させる作品構造のように共通点が多いが、それにも関わらず、フォークナーのヨクナパトーフア・サーガの中心的作品群への言及は極めて乏しい。こうしたフォークナーに対する言及の漏れを、1950年代の日本の知識人層におけるアメリカ文学の位置に起因するものと見做し、占領後初期の日本におけるアメリカの文化的支配への抵抗のひとつの現れとして、アメリカ文学の影響に対する否認があった可能性を示唆した。

こうした考察を経て、戦後の日本人作家・文学研究者に対するフォークナーの政治的・文化的影響と、現代のアメリカ文学・日本文学研究に到るまで残る余波について再検討を行い、フォークナーを通じて日本の文学研究を再び問い直す試みを実践した。

日本比較文学会 第55回中部大会

日時：2023年12月2日(土)

場所：愛知学院大学名城公園キャンパス アリスタワー3階 7301教室

以下の愛知学院大学名城公園キャンパスマップをご参照ください

https://www.agu.ac.jp/pdf/guide/campus/meiyo_campus2023.pdf

11:30-12:50 幹事会 (アガルスタワー10階 会議室1)

大会進行 杉浦 清文(中京大学)

13:00 開会の辞：星野 幸代(名古屋大学)

13:10-13:45 研究発表(発表25分、質疑応答10分)

「佐々木孝丸の心象風景—気体・液体・電波を手がかりに」

発表：中村 能盛(名古屋大学大学院博士後期課程修了)

司会：若松 伸哉(愛知県立大学)

13:45 休憩 (15分)

14:00-16:30 藤岡伸子さん 追悼シンポジウム

「言葉の力を信じたい～つくる／はたらきかける力を文学

／文化研究に取り戻す試みを～」

司会・ディスカッサント：岩田 和男(愛知学院大学)

14:00 趣旨説明

14:15-15:45 (各話題30分)

1. 「他者の立場から語られる原爆の物語

——長崎の〈土地の力〉から「個人の生」を考える」

平林 美都子(愛知淑徳大学・名誉教授)

2. 「金子筑水による〈新理想主義〉受容と〈文化主義〉提唱」

林 正子(岐阜大学・名誉教授)

3. 「実存主義的自由のために——安部公房、柄谷行人、D・グレーバー」

大場 健司(九州共立大学)

15:45 休憩 (10分)

15:55 シンポジウム 質疑・議論(35分)

16:30 閉会の辞：小松 史生子(金城学院大学)

第 55 回中部大会 シンポジウム

藤岡伸子さん 追悼シンポジウム

「言葉の力を信じたい～つくる／はたらきかける力を文学
／文化研究に取り戻す試みを～」

司会・ディスカッサント

岩田 和男(愛知学院大学)

報告

平林 美都子(愛知淑徳大学・名誉教授)

林 正子(岐阜大学・名誉教授)

大場 健司(九州共立大学)

趣旨説明

藤岡さんの訃報に信じられない気持ちがまだ拭えずにいるが、それでも時は過ぎる。オンラインでご一緒したシンポジウムからでも、もう 2 年半である。追悼シンポジウムをとお声がけしたところ、快くお引き受けいただいた。お付き合いいただけたお二人には、向こうで聞いてくださっている藤岡さんに向けて、「つくる／はたらきかける力」に関する新たな知見を含めた続きのご報告をお願いしたい。そしてもう一人、気鋭の若手研究者(九州支部)である大場健司氏に加わっていただけることになった。藤岡さんの遺志が未来につながっていく方向が模索できればと考えている。

改めて趣旨説明をしておく。第 50 回中部大会シンポジウムの「文化研究と文学研究の間—文化を誰がどう読み解くのか」のポイントは、「『言葉の力』を介して『つくる／はたらきかける』力」であった。その力が、「文化と文学という本来一つながりの営みが有効に連動する」はずの「文学研究」にはあるはずだ。そういう確信があるにもかかわらず、なかなか現実はそうならないもどかしさを関係者は日々感じている。それだけではない。教育的効率を求める人文系の他分野研究者からも、その「社会的はたらきかけ」の希薄を、表立ってというわけではないにせよ、内心は批判的に見られていると感じることも実は少なくなく、文化・文学研究はまるで「お荷物」であるかのような扱いだ(被害妄想?)。

とある大学文学部の英語専門学科で毎年行われる授業アンケートに「その科目

は人生に役立つと思いますか」という質問項目があって、専攻生の回答のほとんどは「思わない」だそうだ。評価が高いのは職業に直結する技術を学ぶ「実学」系学部である。確かにこれらは人間が生きる上で必要なものを「分節化」した学問系には違いない。シンポジウムで藤岡さんは「生きる場の劣化・矮小化・分節化」を問題視し、文学と文化をまたぐ活動例として、ウィリアム・モリスの創作・デザイン、ナショナルトラスト、柳宗悦の手仕事の復興、柳田国男の民俗学収集、アルド・レオポルドの環境保全などを挙げられた。活動はみな人間生活(昔の人々の生活、環境)に関わるものであった。藤岡さんが考えたかったのは人間が生きること(文化)であり、人間の営みを「統合化」する文学である。それこそが「文学と文化の結節点」なのではないだろうか。

しかし、本来、人間の営みを「統合化」する〈文学研究〉とは、「人の『生きる場』がいかに分節化を免れ」ているか、そして、その「場」がいかに「活力に満ちて創造的なものとなりうるか」を示すものであったのではないか。なぜそうならない、あるいは、そうなれないのだろうか。誤解を恐れず敢えて言うが、たとえば心理学がそうだと一般に感じられているようには、である。

今になって考えてみれば、前回シンポジウムは、文学研究が人間学(humanities)であることの確認であればいい、ということだったのだろうか。そんなことならわかりきっていると反論がおそらくあるだろう。しかし、「人間学」と訳すかどうかはさておき、humanities とは「リベラル・アーツ」である。「教養」と訳されたこの語が、20世紀終わりごろから始まり昨今まで続いている大学教育改革において如何に「鬼っ子」扱いされてきたか、知らない者はいない。「教養部」がほぼ大学から消えてなくなった現在、それがいわゆる「文学研究」を生業とする文学部の研究者に向けて発せられつつある。文学研究に携わる者にそれ相応の覚悟は必要だろうと思い、敢えてその間いを引き受けたい。人びとに働きかける力を有した、「活力に満ちて創造的なものとなりうる」〈文学研究〉とは何なのかを。

各報告者による新たな知見の提供は、以下のとおりである。

他者の立場から語られる原爆の物語

—長崎の〈土地の力〉から「個人の生」を考える

平林 美都子

世界史的な事象や文化が積み重なる長崎は、19世紀末から土地とは無縁な海外の文学者らの想像力を喚起してきた。21世紀になると、長崎原爆を念頭に置きつつ、文化的同質性を超えたグローバルな視点から個人の生の極限に向き合うような「豊饒な物語」(野家 187)がフィクション・ノンフィクションの形で生まれている。今回の発表の前半では、まず物語を生み出す〈土地の記憶の力〉について考察する。次に長崎原爆を扱う4作品(Kamila Shamsie, *Burnt Shadows*, 2009; Susan Southard, *Nagasaki: Life After Nuclear War*, 2016; Caren Stelson, *Sachiko: A Nagasaki Bomb Survivor's Story*, 2016; J. Willis, *Nagasaki: The Forgotten Prisoners*, 2022)を取り上げ、国民に刷り込まれたナショナリズム、それを解きほぐす可能性、加害/被害の因果関係を考察し、「個人の生」の物語を他者の立場から聴く(読む)ことの意義を考えたい。後半では、総じて作品解釈という文学研究が、果たして社会に働きかける力があるのかを問いかけたい。文学研究とは他者の立場から前提としていることを批判検証していく作業ではないだろうか。読書が「豊かな個」(吉田純子、「日曜に想う」『朝日新聞』2022, 11, 27)を学ぶことだとすれば、文学研究者は読者にその「気づき」のヒントを与える役目があるのではないか。少なくともそうした自覚を持つことが求められているように思う。

金子筑水による〈新理想主義〉受容と〈文化主義〉提唱

林 正子

従来、坪内逍遙門下の早稲田派のひとりと括られ、その思想の具体的内容について言及されることは稀であった文芸思想家・金子筑水(1870~1937)の論説を読み解くことによって、人生問題を対象とする彼の〈人生観〉の哲学の内実を明らかにしたい。人生に基礎を置かない純論理的・思弁的思考は、哲学の真髄から迂遠なものであるという思想を、筑水は繰り返し主張しているからである。

具体的には、筑水の「自然主義と文明問題」(1908年1月)、「個人主義の盛衰」(1908年9月)、「ルドルフ、オイッケン」(1910年1月)、「文藝及び思想の取締」(1910年11月)、「國民思想の動揺」(1911年3月)、「神経衰弱」(1911年5月)、「近代主義の淵源」(1911年11月)など博文館『太陽』掲載の論説を中心に

考察することによって、筑水の哲学者としての客観的思考、美学者としての繊細な感性、文芸批評家としての正確な分析力を明らかにすることをめざす。彼の思想から〈言葉の持つ力〉を確認することが趣旨である。

とりわけ、近代日本の文学における自然主義隆盛という時代状況のなかで、オイケン哲学の受容を一つの契機として展開された筑水の〈新理想主義〉は、現代文明の超克による精神生活の建設を提唱していることから、その〈文化主義〉が、現代の我々にとっての文学研究と文化研究の結節点となり、「つくる／はたらきかける力」の生成を導く可能性について模索したい。

「実存主義的自由のために——安部公房、柄谷行人、D・グレーバー」

大場 健司

かつて文化人類学者D・グレーバー(David Graeber, 1961-2020)が『ブルshit・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』(*Bullshit Job: A Theory*, 2018)において論じたのは、我々を疲弊させる無駄な仕事が、合理化を徹底する新自由主義(neoliberalism)によってこそもたらされている、という状況についてであった。だからこそ、現代の労働の現場では無駄なペーパーワークや会議が横行し、教育現場では「役に立つ」(practical)実学ばかりが評価される。これこそが、我々の「生きる場」を「分節化」し、無意味な競争に駆り立てるものの正体である。このような「いとわしい競争」からの「失踪」を描いたのが、安部公房(1924-1993)の『砂の女』(新潮社、1962年6月)や『燃えつきた地図』(新潮社、1967年9月)といった長編小説であった。本発表では、この「失踪」をJ・P・サルトル(Jean-Paul Sartre, 1905-1980)の実存主義や、柄谷行人(1941-)によるポストモダニズム(postmodernism)批判、D・グレーバーのアナキズム(anarchism)といった視座から吟味する。1980年代に新自由主義と連動する形でポストモダニズムが流行するのだが、それ以降、ポストモダニズム内部からポストモダニズムへの批判が行われるようになる。その際に再評価されるようになったのが、実存主義やアナキズムであった。この文脈に安部公房のテキストを置いてみることで、文学／思想／政治を横断する「知」の在り方と社会的「状況」との関わりを問う。

第 55 回中部大会研究発表要旨

佐々木孝丸の心象風景—気体・液体・電波を手がかりに

中村 能盛(名古屋大学大学院博士後期課程修了)

フランス文学の翻訳者から始まりプロレタリア文学者、そして舞台俳優兼演出家を経て、戦後に映画俳優となった佐々木孝丸は、現在のマルチ・クリエイターの先駆けであった。本発表では、分野を超えて佐々木孝丸が関わった作品の傾向を解明する。「文学」においてはブルーノ・ヤシェンスキの『パリを焼く』の翻案のみならず、佐々木自身による『種蒔く人』に掲載された随筆などを研究対象として定め、「演劇」を経由し、戦後は俳優のみならず、夏目漱石の原作を監督する予定であった「映画」の 3 分野に焦点を当てる。具体的な接点ないしは共通項を見出す手掛かりとして、各分野における「気体」「液体」そして「電波」の 3 項目に着目して、分析を進める。

支部長便り

星野 幸代

9 月に学務で台北へ行き、中正紀念堂の展示室を見る機会がありました。展示テーマ①「蔣中正 [蔣介石] 總統与 中華民國」と、②「自由的靈魂 vs. 独裁者 Taiwan's long walk to freedom of speech 臺灣言論自由之道」のいずれも常設で、台湾の民主主義への強い意志を感じます。台湾が戒嚴令解除ののち初の直接選挙による総統選を迎えたのは 1996 年、現在も台湾からの留学生たちは選挙の為に帰国するそうです。常設展示②の趣意文冒頭を抜粋します。「自由之於人，有如空气之於生物；擁有時，被視為理所当然，甚至渾然無感；而一旦失去，却立即窒息難耐，陷入痛苦掙扎。」(日本漢字に改めた)

2024 年春の支部大会は、6 月愛知学院大学(名城公園キャンパス)での全国大会に代えさせていただきます。皆様、ふるってご参加ください。

2023 年度の中部支部役員

支部長：星野 幸代
代表幹事：松本 三枝子
事務局長：杉浦 清文
ニューズレター編集：中村 晴香
HP 管理：若松 伸哉
会計監査：林 久博

幹事：岩田 和男	尹 苙汐	工藤 貴正	香ノ木 隆臣
小松 史生子	杉浦 清文	中村 晴香	林 正子
平林 美都子	星野 幸代	松本 三枝子	メベッド シェリフ
森 有礼	若松 伸哉		

※支部運営についてのご意見やご提案など、役員の誰にでもお気軽にご連絡下さい。研究発表のお申し込みも随時受け付けております。また、みなさまのご意見・ご連絡等をコンスタントに集約するため、メールでの連絡窓口も設けています。[hikaku-chubu\(at\)googlegroups.com](mailto:hikaku-chubu(at)googlegroups.com) (※(at) は @ に置き換えて下さい)をご利用下さい。

事務局からのお願い

■ご異動、お引越しなどに伴う登録情報の変更について：

ご異動、お引越しなどに伴う登録情報の変更がありましたら、速やかに本部事務局長 藤澤博康先生([hikaku.henko\(at\)gmail.com](mailto:hikaku.henko(at)gmail.com) ※(at) は @ に置き換えて下さい。)、及び下記中部支部事務局にご連絡下さい。近年、本部で作成する名簿が支部へ送付されなくなり、照合や修正に手間取ることが多くなっています。ご面倒ですが、本部と支部の両方へご連絡下さいますよう、どうぞ宜しくお願いいたします。

日本比較文学会中部支部ニューズレター第 31 号 2023 年 11 月 13 日発行

発行人：星野 幸代
編集担当：中村 晴香
発行：日本比較文学会 中部支部
事務局：〒466-0815
愛知県名古屋市昭和区山手通 5 丁目 31-2
アネックス 中京大学国際学部
杉浦 清文 研究室

TEL：052-835-7392

E-mail：[ksugiura\(at\)lets.chukyo-u.ac.jp](mailto:ksugiura(at)lets.chukyo-u.ac.jp)

(※(at) は @ に置き換えて下さい。)